奈良公園歌碑句碑解釈・作者説明

⑦ 采女神社	柿本人麻呂	わぎもこが寝くたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞ悲しき　**大和物語** （拾遺和歌集） 猿沢の池に浮かぶ水草を見ていると、わが愛しい人が寝乱れた髪を思い出して悲しい。
	帝	猿沢の池もつらしな我妹子が玉もかづかば水ぞひなまし　**大和物語** 猿沢の池も酷いなあ。わが愛しい人が池に飛び込んで水草がからんだなら、 水を干上がらせてくれればよかったのに。そうすれば、彼女は死なずにすんだのに。

柿本人麻呂（６６２年～７１０年）

飛鳥時代の歌人。名は「人麿」とも表記される。後世、山部赤人と共に歌聖と呼ばれ、称えられている。三十六歌仙の一人で、平安時代からは「人丸」と表記されることが多い。彼は『万葉集』第一の歌人といわれ、長歌19首・短歌75首が掲載されている。

[采女伝説]　（大和物語・・世阿弥作？）

昔、奈良の帝にお仕えしていた采女(女官)がいた。顔も姿もたいそう美しいので人々が求婚して、殿上人なども言い寄っていたが、采女は逢わなかった。采女は帝のことを限りなく素晴らしい方と思い申上げていたからだ。ある時、帝が采女を召した。しかし一度だけで、二度とは召さなかったので、采女は限りなく悲しく思っていた。夜も昼も心にかかってお思いしつつ、恋しくわびしくお思いになっていた。帝は一度は采女を召したものの、別段何とも思われなかった。そうはいっても、采女は宮中で日常的に帝を拝見していた。采女はこのまま生きているのはいたたまれない気持ちになったので、夜ひそかに御所を抜け出し、猿沢の池に身を投げてしまった。このように采女が身投げしたことを帝は御存知ではなかったが、事のついでがあって、人が帝に申し上げたので、知られることとなった。たいそうひどく哀れにお思いになり、池のほとりに行幸なさって、人々に歌をお詠ませになった。その中に柿本人麻呂が、

わぎもこが寝くたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞ悲しき

と詠んだ歌に、帝は、

猿沢の池もつらしな我妹子が玉もかづかば水ぞひなまし

とお詠みになった。さて、この池に墓をお建てになって、お帰りになったということである。

「ならの帝」が誰であったかは、文武・聖武・平城天皇との諸説があり、特定できないようですが、上記の歌について『南都七大寺巡礼記』では平城天皇の作としており、『采女』における帝が平城天皇である可能性が大といえるかも知れません。ただし柿本人麻呂と同時代の帝とするならば、少し時代が一致しないかもしれません。

[陸奥国の葛城王の物語]

「葛城王（橘諸兄とする説が有力）が陸奥に遣わされた時、国司の接待がまことにお粗末だったため、王の機嫌はよろしくなく、憤懣の気持ちが顔に現れていた。そこに以前都で采女として仕えていた女が盃を手にして進み出で、王の膝を打ちながらこの歌を詠んだ。それにより王のわだかまりは解け、歓を尽くす宴となった」という次第です。采女は宮廷の宴席に奉仕していたので、こうした場の取りなしには慣れていたことでしょう。

安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに

⑧ 猿 沢 池 北	会 津 八 一	わぎもこ　が　きぬかけ　やなぎ　みまく　ほり　　**鹿鳴集・南京新唱（第１１首）** いけ　を　めぐり　ぬ　かさ　さし　ながら 采女が愛を失って入水する前に掛けたと伝えられている衣掛柳を見たいと思って猿沢の池をめぐり歩いた。折からの雨に傘をさしながら 猿沢池　「興福寺境内の南にある奈良八景の一つ、池畔に衣掛柳がある」 わぎもこ・・吾が妹（いも）のつまった語で、妻や恋人をさす きぬかけやなぎ　「天皇の寵を失い池に身を投げた采女が上衣を掛けた柳」 ２８才の「若き八一の憂い」と古代に対する憧憬が甘味に詠われている。 平成１０年７月、奈良セントラルライオンズクラブが歌碑を建てた

会津八一

新潟県新潟市古町通五番町に生まれる。1881年（明治14年）8月1日に生まれたことから八一（やいち）と名付けらた。中学生の頃より『万葉集』や良寛の歌に親しんだ。雅号 秋艸道人（しゅうそうどうじん）。東京専門学校（早稲田大学の前身校）に入学し、坪内逍遙や小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）らの講義を聴講した。

1906年早稲田大学英文科卒業。卒業論文にはキーツをとりあげた。1908年に最初の奈良旅行をおこなって奈良の仏教美術へ関心を持ち、またこの旅行が俳句から短歌へと移るきっかけともなった。初めての歌集『南京(なんきょう)新唱』(1924年)を刊行(南京=奈良)。1925年には早稲田高等学院教授となり翌年には早稲田大学文学部講師を兼任して美術史関連の講義をおこない、研究のためにしばしば奈良へ旅行した(35回以上)。1931年には早稲田大学文学部教授となる。 1933年に仏教美術史研究をまとめた『法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究』（東洋文庫）が刊行され、この論文で1934年に文学博士の学位を受ける。1948年、早稲田大学名誉教授。1951年、新潟市名誉市民となる。同年、『會津八一全歌集』を刊行し、読売文学賞を受けた。75歳没。生涯独身

⑨ 興 福 寺 湯 屋 北	会 津 八 一	はる　きぬ　と　いま　か　もろびと　ゆき　かへり　　**鹿鳴集・南京新唱（第１０首）** ほとけ　の　には　に　はな　さく　らし　も 春がやって来たと今や多くの人が興福寺の庭を行き来して、そこには桜の花が咲き乱れているだろう。 もろびと　「多くの人々」 ゆきかへり　「行ってはまた引き返す」 ほとけのには　「ここでは興福寺の庭をさす」 はな　「さくらの花」 らし　「きっと・・・だろう。推量の助動詞」 遠く古都を想いながら、桜の花が咲き乱れ、多くの人が行きかう大寺の春をおおらかにゆったりと歌い上げ、豊かな調べの向こうに絵画的な情景を浮かび上がらせている。 平成１９年３月、興福寺にこの歌の歌碑が建立され、３月３１日に除幕式があった。

⑩ 県 庁 東	伊 勢 大 輔	いにしえの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほいぬるかな　　百人一首　６１番 昔、奈良の都で咲き誇っていた八重桜が、今日はこの宮中で、いっそう美しく咲き誇っているではありませんか。 「九重(宮中のこと)」 出典・・詞花集　この和歌は、当時の京都ではまだ珍しかった、奈良の八重桜が宮中に送られたとき詠まれたものだといわれていますが、まさにその場に相応しい見事な和歌になっている。

伊勢大輔（いせのだいふ）

祖父は大中臣能宣（おおなかとみのよしのぶ）、父は正三位神祇伯・大中臣輔親（おおなかとみのすけちか）で、代々歌詠みの家系として知られていました。父が伊勢神宮の祭主、神祇大副（じんぎのたいふ：大輔）の職にあったところから伊勢大輔と呼ばれました。美貌の人で、上東門院彰子が中宮として敦成親王を生んだ50日目の祝宴には、選びぬかれた若女房の一人として配膳に奉仕しています。紫式部とともに、2年後に出仕した和泉式部とも親しい間柄でした。勅撰集に51首も選ばれ、中古三十六歌仙、女房三十六歌仙の一人です。

中古三十六歌仙（ちゅうこさんじゅうろっかせん）は、平安時代末期に藤原範兼が『後六々撰(のちのろくろくせん)』に選び載せた和歌の名人36人の総称。 三十六歌仙が選ばれた後に称されたもので、三十六歌仙に属されなかったが秀でた歌人とそれ以後の時代の歌人が選ばれている。

女房三十六歌仙は、鎌倉中期に成立した『女房三十六人歌合』に歌を採られた女性歌人三十六人を指す。

⑪ 県 庁 東	作 者 不 詳	見渡せば　春日の野辺に　霞立ち　咲きにほへるは　桜花かも　（10－1872） 春日野に霞が一面に立つ中、輝くばかりに色美しく咲く桜は　今真っ盛りです 春日野は現在飛火野とよばれる奈良公園一帯。 浮見堂、東大寺、戒壇院、二月堂周辺に咲く桜も多く、古い寺院と調和して実に美しい。 「にほへる」の原語は「艶」。色の美しさを意味していて、香りではない。

⑫ 氷 室 神 社	大 伴 家 持	うらうらに 照れる春日 は る ひ に ひばりあがり 情 こころ 悲しも ひとりしおもへば (19-4292) うららかに照っている春日の中、ひばりが空に上がり、心は悲しい。一人もの思いをしていれば ・うらうらに・・・日の光がのどかで明るいさま ・照れる…「照る+れり(存統の助動詞)の連体形 ・ひばり上がり…ひばりが明きながら、空高く舞い上がっていく様子 ・悲しも・・「も」は詠嘆の終助詞で、文末,文節末の項々の語に付き、「・・なあ。・・ね。　・・ことよ』などの意味となる ・「ひとりし思へば」は倒置の副詞節 大友家持の有名は歌、代表的な作品の一つで春愁三首と言われる歌の、3首目の歌。 明るい春の景色と対照して、孤独な物思いと悲哀の情を詠うのが主題

大伴家持

大伴家持は、奈良時代の貴族・歌人であり、波瀾の万葉歌人と言われ、その人生は左遷と昇進の繰り返しであった。もともと大伴氏は大和朝廷以来の武門の名家であり、祖父・安麻呂、父・旅人と同じく律令国家の高級官吏として歴史に名を残し、延暦年間には従三位　中納言にまで昇っている。奈良時代において中央政界で台頭する藤原一族に対して、名門氏族の棟梁であった家持は、「反藤原」の動きに関わることも多く、中央官僚復帰と地方官僚への左遷を繰り返している。光仁・桓武天皇の時代に入ると、都の要職や大国の守を歴任する一方で順調に昇進し、７８０年（宝 亀 11 年）に参議に任ぜられて公卿に列し、やがて先任の参議を越えて中納言に昇進した。

大伴家持の歌は長歌・短歌など合計 473 首が『万葉集』に収められており、『万葉集』全体の 1 割を超えていることから家持が『万葉集』の編纂に関わったと考えられている。家持は年長の歌人・文化人である山上憶良の影響を強く受けていると言われている。三十六歌仙の一人。

⑬	仁徳天皇	高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり(新古今集) 高殿に登って見ると煙が立っている。人民は料理ができるほどに裕福になって来たのだ。 煙=ここでは炊事の煙。 仁徳天皇が、民の生活の安定を知り、自ら善政をたたえた歌。炊事の煙の立たない光景から人々の生活の苦しみを察知した天皇が、３年間租税を免除し、その結果人々の生活にもゆとりが生じたと『古事記』に記載がある。
氷室神社		

仁徳天皇

第16代天皇。誉田天皇（応神天皇）の第四皇子。難波高津宮に都を移す。即位2年、武内宿禰の孫娘の葛城磐之媛を皇后とした。人家の竈（かまど）から炊煙が立ち上っていないことに気づいて3年間租税を免除した

⑯	会津八一	おほらかに　もろて　の　ゆび　を　ひらかせて　　南京新唱 おほき　ほとけ　は　あまたらしたり 大きくゆったりと両手の指をお開きになって、大仏様はこの宇宙に広く満ち広がっておられる。まるで宇宙そのもののように。 おほらかに・・「ゆったりとして」　　施無畏印・・恐れずに来てください もろての指・・両手　たらす・・充実する　　与願印・・・願いをかなえてやります ひらかせて・・「お開きになって」 あまたらしたり・・「天地の空間に広く満ち広がっておられる。」 歌碑建立は昭和２５年１０月
東大寺真言院前		

⑱	光明皇后	我が背子(せこ)と、ふたり見ませば、いくばくか、この降る雪の嬉しからまし(8-1658) あなたの(聖武天皇のこと)といっしょに二人で見れば、どれだけこの降る雪が嬉しく思われるのでしょうか。 この歌の題詞には「藤皇后(とうこうごう:光明皇后)の天皇（聖武天皇)に捧げる御歌一首」とある。聖武天皇が恭仁京の造営を宣言した前後に詠まれた可能性が高い冬の相聞歌（そうもんか）（男女が親愛の情をうたった歌）として納められている
大仏殿裏西		

光明皇后

聖武(しょうむ)天皇の皇后。藤原光明子(こうみょうし)。名は安宿媛(あすかべひめ)。のち中台天平応真仁正皇太后(ちゅうだいてんぴょうおうしんにんしょうこうたいこう)。父は藤原不比等(ふひと)、母は橘三千代(たちばなのみちよ)。716年（霊亀2）皇太子首(おびと)親王妃となり、724年（神亀1）首親王が即位して聖武天皇となるとともに夫人となり、729年（天平1）長屋王の変の後まもなく臣下の女としては異例の皇后となったが、当時皇后は天皇と並んで国政に参画する伝統があり、以後藤原氏の政界活動のよりどころとなった。立后と同時に皇后宮職(こうごうぐうしき)が置かれたが、749年（天平勝宝1）には昇格して紫微中台(しびちゅうだい)と改称し、長官に藤原仲麻呂(なかまろ)が就任するに及んで、ここは実質的に政治を主導するところとなった。
皇后は天皇とともに仏教を深く信仰し、国分寺の建立、東大寺大仏の造営などを積極的に勧めたといわれ、病人や孤児の救済のため施薬院(せやくいん)や悲田院(ひでんいん)など福祉施設をつくったことでも知られる。

⑳ 二月度下	松尾芭蕉	水とりや籠りの僧の沓の音 （芭蕉翁発句集） 二月堂のお水取りで籠っている僧の下駄の音が響いている 「春なれや」とはいっても、三寒四温。お水取りの僧の沓の音は寒夜に響いて、季節は一進一退している。「お水取り」は二月堂修二会（しゅにえ）の主要行事。 「野ざらし紀行」では水とりや氷の僧の沓の音と芭蕉の自筆で載っていて本物である。 なぜ東大寺は籠りを選んだのかは不明。 『芭蕉翁發句集』などでは「水とりやこもりの僧の沓の音」とある。また、『芭蕉句選』では「水鳥や氷の僧の沓の音」とあるが、これらはいずれも杜撰。

松尾芭蕉

本名、松尾宗房（むねふさ）。伊賀国上野（三重県）出身、幼名金作。６人兄妹の次男。井原西鶴、近松門左衛門と並んで、元禄３文豪に数えられる（西鶴は２歳年上、近松は９歳年下）。松尾家は準武士待遇の農民。12歳の時に父が逝去。18歳で藤堂藩の侍大将の嫡子・良忠に料理人として仕える。藤堂高虎を藩祖とする藤堂藩には文芸を重んじる藩風があり、芭蕉も良忠から俳諧の手ほどきを受けて詠み始めた。20歳の時に『佐夜中山集』に２句が入集。22歳、師と仰いでいた良忠が没し、悲しみと追慕の念からますます俳諧の世界へのめり込んでいく。（京都で俳諧の勉強を積んだとも）
伊賀俳壇で若手の代表格として地位を築いた芭蕉は、仕官を退き江戸へ出て、1677年（33歳）、俳諧師の免許皆伝となり、宗匠（そうしょう、師匠）となった彼は、江戸俳壇の中心地・日本橋に居を定める。プロの俳諧師になったとはいえ、俳句の指導だけでは生活が苦しいので、副業として４年近く神田上水の水道工事の事務を担当する。
1684年（40歳）、前の年に郷里・伊賀で母が他界したことを受け、墓参りを旅の目的に、奈良、京都、名古屋、木曽などを半年間巡る。この旅の紀行文は、出発時に詠んだ「野ざらしを心に風のしむ身かな」の句から『野ざらし紀行』と呼ばれる。
1689年３月27日（45歳）、「芭蕉庵」を売り払うなど旅の資金を捻出し、万葉集や古今集といった古典に詠まれた歌枕（名所）を巡礼する目的で、弟子の曾良（そら、５歳年下で博学）を供に江戸を発った。この『おくのほそ道』の旅は、福島県白河市（白河関）、宮城、岩手、山形、北陸地方を巡って岐阜・大垣に至るという、行程約2400km、７ヶ月間の大旅行となった。

㉒ 手 向 山 八 幡	菅 原 道 真	このたびは　幣(ぬさ)もとりあへず手向山(たむけやま)　もみぢの錦神のまにまに （古今和歌420） この旅(度)は、御幣(ごへい)の用意もせずに手向山に来ましたが、錦のような紅葉を、 どうぞ神様の御心のままにお受け取りください。 (幣とは：色とりどりの木綿や錦、又は紙を細かく切ったものを 木か竹に挟んだもの。 旅の途中で道祖神にお参りするときに 捧げる。御幣 ご へ い ・幣束 へいそく とも言う)

菅原道真

菅原道真は、平安時代の貴族で政治家で、菅原道真は若いときから学者や役人としての力を発揮し、右大臣（政治の最高機関の太政官の閣僚で、政務を統轄する職）になった。しかし菅原道真の出世をよく思わない人物もいて、藤原時平は父が太政大臣をしていた名門の生まれで、さほど家柄も良くない菅原道真が目障りだった。藤原時平は、菅原道真を信頼していた宇多天皇（うだてんのう）が退位し、醍醐天皇（だいごてんのう）に代わると「菅原道真が娘婿（皇子）を天皇にしようとしている」と醍醐天皇に告げ口する。これを信じた醍醐天皇は、菅原道真を九州の大宰府（だざいふ・現在の福岡県太宰府市）の大宰権帥（大宰府の長官）に左遷した。疑いが晴れることはなく、2年後に亡くなった。菅原道真の死後、菅原道真追放に関わった人たちが次々と亡くなった。「菅原道真の呪いだ」と恐れ、おん霊、すなわち天神として御霊を鎮めるために『太宰府天満宮』『北野天満宮』が建てられた。生前、菅原道真が学問にすぐれていたことから、学問の神とあがめられるようになった。

㉓ 手 向 山 八 幡	湯 原 王	秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の声の遙(はる)けさ (8-1550) 秋萩が盛んに散り乱れている中、鹿の声が遥か彼方から聞こえてくる。あれは妻を呼び立てて鳴いているのだろう。 万葉集の歌で鹿などが「妻を呼ぶ」という場合は、妻となる相手を探して鳴いているという意味になる。

湯原王

生没年未詳。奈良時代の歌人。天智(てんじ)天皇の皇子、志貴皇子(しきのみこ)の子。光仁(こうにん)天皇の弟。政治の表には姿を現していないので閲歴は不明。『万葉集』に短歌19首が残る、後期万葉の代表的歌人の一人。作品には宴席での即興歌や、名不明の娘子(おとめ)との贈答歌もあるが、写実的な歌に佳作が多い。湯原王には同腹の兄弟で奈良豆比古神社縁の春日王がいる。

㉔ 若 草 山 裾 野	松 尾 芭 蕉	奈良七重七堂伽藍八重ざくら(泊船集) 奈良の都は、西暦710年～784年間の約70年間、天皇7代（元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・称徳・光仁）続いた後、遷都された。七重の意味70年７代を指す。七堂は、金堂講堂などを指すが必ずしも固定された概念ではなく完備された堂宇の意という。ただし、奈良の諸宗では、金堂・講堂・塔・鐘楼・経蔵・食堂（または中門）・僧坊を指したという。

㉕ 春日大社内侍門下 阿倍仲麻呂	あまの原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に いでし月かも 古今和歌集（羇旅歌 406首目） 空を見上げると月が昇っている。この月は（奈良県の）春日山から見た時の三笠山（現在の御蓋山）に昇る月（と同じもの）なんだよなぁ。 「天の原」は空、「ふりさけみれば」は見上げてみれば、「春日なる」は春日山から、「三笠の山の」は三笠山に、春日大社後方、春日山原始林の手前にある山。若草山と高円（たかまど）山の間にあります。御笠山とも御蓋山とも書きます。「いでし月かも」は昇ってきた月なんだなぁ（感嘆）といった意味になります。 古今和歌集に「もろこしにて月を見てよみける」とあることから、中国（南方）で月を見て詠んだ詩。帰国を許され、明州で送別の宴が催された時に詠まれた。

阿倍仲麻呂

17年、16歳の頃、遣唐留学生に選ばれ、吉備真備（きびのまきび）、玄昉（げんぼう）らとともに中国(唐)の都・長安へ渡った。彼の秀才ぶりが次第に周囲に認められ、難関の科挙に合格、玄宗(げんそう)皇帝に気に入られたため、唐にとどまって活躍した。中国名「朝衡（ちょうこう）」として36年仕えた天平勝宝5年（753年）、53歳となった仲麿は、その時遣唐使として来ていた藤原清河(きよかわ)とともに帰国することを決意する。玄宗皇帝に帰国を許され、明州(みんしゅう)の浜で唐の友人たちによる送別会が開かれたが、暴風で船が難破し、安南（あんなん：ベトナム）の海岸に漂着した。仲麿は苦労して長安に戻ったが、日本への帰国をあきらめるほかなかった。
結局、長安で72歳で亡くなった。

㉖ 駐車場北 春日大社 阿波野青敏	玉砂利の 奏楽めくや 初詣　　俳誌ひいらぎ 奏楽(そうがく)とは、音楽を演奏すること、また、その音楽のこと。

阿波野青畝（あわのせいほ）

畝傍中を卒業。難聴のため進学を諦め八木銀行（現・南都銀行）に入行。
昭和を代表する高取町出身の俳人。大正13(1924)年に25歳と若くして、夏目漱石の『吾輩は猫である』などが連載された俳句雑誌『ホトトギス』の課題句選者となる。その後、山口誓子らと共に昭和の四S(しいエス)と呼ばれる作家の一人として、同誌の黄金時代を築いた。
また高浜虚子と出会い師事する。俳句雑誌「かつらぎ」を創刊。勲四等瑞宝章を受章
句集は昭和6(1931)年の『萬両』から、93歳で没した翌年の平成5(1993)年に刊行された『宇宙』まで11冊。

㉗ 車場北 春日大社駐 倭健命	倭（やまと）は 国のまほろば　たたなづく青垣（あをかき） 山籠（やまごも）れる 倭し麗（うるは）し　（古事記中巻歌謡 30） 大和は国の中でも最もよいところだ。重なり合った青い垣根の山、その中にこもっている大和は美しい 古事記では倭健命は伊吹山で傷を負い、能煩野（のぼの）という場所（三重県の亀山市付近と言われています）で亡くなったと書かれています。亡くなる前、倭健命は帰れないふるさとへの思いをこめ、次のような歌を詠んだ。

倭建命

記紀による伝説的英雄。景行天皇を父とする。16才の時、景行天皇の命じられ九州の熊襲に攻め入った。その際、女装して首長川上梟帥の宴に紛れ込み、梟帥を刺殺した。この時、梟帥に賞され、日本武皇子の名が贈られた。その後、東国の蝦夷による乱が起き、再び尊が命を受けた。途中、伊勢神宮に仕えていた叔母倭姫命より草薙剣を授けられ、これが焼津で賊の放った火から逃れるのに役立った。平定後、帰途尾張で宮簀媛と結婚した。ここで五十葺山で荒れ狂った神を鎮めようとして逆に病を煩い、伊勢に入り能褒野で没したと伝わる。このような数々の伝説は、大和朝廷興隆期の勇者たちの伝説をまとめたものと推定。日本武尊に関する逸話は、諸国の風土記に散見される。